

[ 研究区分： 科研費獲得支援 ]

研究テーマ： 朝鮮修信使の服飾に関する研究 —1876年の修信正使の服飾を中心に—	
研究代表者： 人間文化学部 国際文化学科 講師・鄭銀志	連絡先： jeunji@pu-hiroshima.ac.jp
共同研究者：	
【研究概要】 本研究では明治期の朝鮮修信使の正使の服飾が江戸期の朝鮮通信使の正使の服飾に比べどのような変化があったのか、第1次修信正使の入京と天皇謁見時にみる服飾から明らかにすることを試みた。その結果、入京時にみる修信正使の服飾は平常服であった。これは通信正使が着用した公服とは異なったもので、朝鮮服飾の近代化を試みる出発点になったといえる。次に、天皇謁見時にみる修信正使の服飾は紅團領（公服）であったことが判明した。江戸時代の通信正使が天皇に謁見したことは一度もなかったが、京都に入る際には公服で威儀を整えていたことから、日本の天皇への礼は明治時代の天皇にも変わりなく受け継がれていたことが明らかとなった。	

### 【研究内容・成果】

朝鮮修信使は明治日本に派遣された朝鮮初の近代的な性格を帯びた外交使節団であり、1876年から1883年まで4次に亘って派遣された。朝鮮の外交使節団が東京、かつての江戸を訪れたのは、1764年（宝暦14）以来、実に112年ぶりのことであった。近代化を進める日本の状況を目のあたりにした朝鮮修信使は対日関係だけではなく国際情勢にも関心を持つようになる。

現在までの朝鮮修信使に関する研究状況をみると、日韓の研究者による政治・外交的な視点からの研究は行なわれているが、服飾という視点からの研究は極めて少ない状況である。なかでも第1次修信正使の服飾の実体を正確に論証した研究はなされていない。

第1次朝鮮修信使の入京際の様子を描いた『東京絵入新聞』（1876年5月29日）の挿絵には、朝鮮通信使を思わせる大行列のなかに笏持ちの修信正使の姿が描かれている（図1）。頭には紗帽を被り官服を着ている様子から、江戸時代に来日した朝鮮通信使の正使の姿が連想される。しかしながら、明治日本を訪れた修信正使の服飾が江戸時代とほとんど変化していないということがあるのだろうか。

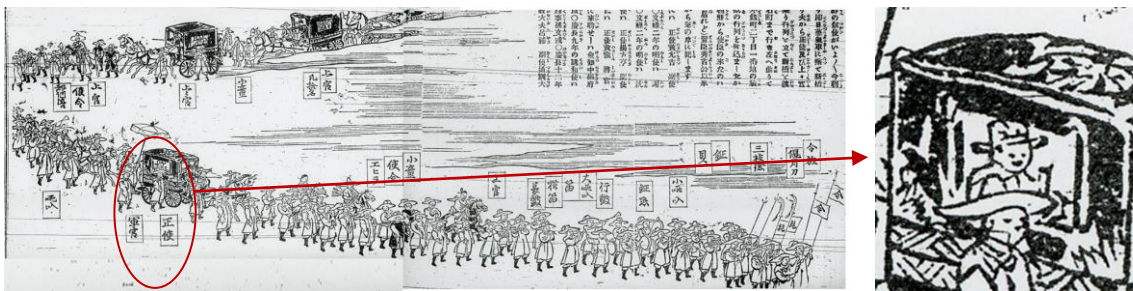


図1. 『東京絵入新聞』の挿絵にみる朝鮮修信使の行列

本研究では第1次朝鮮修信使の正使の服飾に焦点を絞り、明治時代における正使の服飾が江戸時代に比べどのような変化があったのか、入京と天皇謁見の際にみられる服飾から明らかにすることを試みた。

研究方法として、まず、第1次修信正使の来日の様子が窺える英・日・朝の文献史料を精査熟察した。その順番として1) 当事国ではないという点で客観的史料と考えられる英国の『THE ILLUSTRATED LONDON NEWS』の記述を最初に考察した。2) 現地日本側の史料『東京日日新聞』『東京曙新聞』に考察し、3) 朝鮮側の史料である第1次朝鮮修信使の正使・金錡秀の著した『日東記遊』および第1次正使に随行した伴尙副使・安光黙の『滄槎紀行』を考察した。これらの結果を踏まえて、絵画史料との相違について考察を行なった。その成果をまとめる

と、以下の通りである。

まず、入京の際に見る修信正使の服飾を文献史料から考察したところ、英国の『THE ILLUSTRATED LONDON NEWS』(AGU. 26, 1876.) に記された〈THE COREAN EMBASSY TO JAPAN〉という記事には、眼鏡をかけて青色の紗で仕立てられた外衣を着ている修信正使が輿に乗っている様子が記されていた。更にこの記述と合わせて掲載されている挿絵をみると、記事と一致する正使の姿が描かれていた(図 2)。白黒で印刷されているため衣服の色は判別できないが、外衣として袖幅の広い袍を着用し、頭には朝鮮の黒笠を被っている様子である。

以上の考察成果を踏まえた上、日本の史料『東京日日新聞』〈お国ぶり丸出しの朝鮮修信使入京の行列〉明治9年5月30日付の記事と『東京曙新聞』〈韓国修信使来朝〉明治9年5月30日付の記事との比較考察を行なった結果、第1次修信正使が入京時に着用した服飾は、平常服である黒笠に袍の姿であったことが明らかとなった。

これは朝鮮通信使の正使が江戸入城の際に公服を着用していたこととは一線を画したものであり、朝鮮の伝統的な外交儀礼のなかで、公服が果してきた機能が時代の変化によって失われていることを示している。

このことから、朝鮮建国以来固く守られて華夷論的な服飾観が解体し始めたことが指摘できる。修信正使が入京時に着用した平常服は、明治期の日朝関係のなかで、朝鮮側が示した近代的な服制改革の初例として注目すべきところである。これは小さな変化ではあるが、朝鮮服飾の近代化を試みる出発点になったことでその意義は大きい。第1次修信使派遣後18年が経つ1894年に官僚の通常礼服として袍の一種類である周衣が着用されるようになったこと、また1895年には文官服の種類のうち、公服という用語が亡くなったことは、この変化が着実に反映され、朝鮮服飾の近代化を推し進めた証であろう。

ところで、絵画史料にみる修信正使の入京時の服飾は文献史料の考察結果とは明らかな齟齬があった。その相違について3点の絵画史料を取り上げ考察したところ、1) 『東京絵入新聞』の挿絵には朝鮮からの使節を表す一種の記号として紗帽や笏などが描かれていた。2) 『朝鮮応接紀事』の挿絵には文献史料と通じる点もみられたが、笏が描かれ、実際の姿を正確に描いたものとはいえない。3) 歌川芳虎筆「朝鮮信使来朝の図」には朝鮮通信使の軍官服である戦笠に戦服を着用した正使の姿が描かれ、実際の姿ではなく、絵画的印象を第一に作成された。

以上の3点の絵画史料にみる正使の姿はいずれも朝鮮通信使を連想させるもので、1764年の朝鮮通信使の派遣後1世紀を経た後も、朝鮮からの使節団に対する日本人の固定観念が続いている様子が窺えた。

次に、天皇謁見の際にみる修信正使の服飾について考察したところ、『日東記遊』巻2〈問答〉9と『滄溟紀行』5月10日条(6月1日)の記述から、正使は天皇に謁見する際に朝鮮国王の謁見時と同じ礼法を行ない、紅團領(公服)を着用していたことが判明した。江戸時代、朝鮮通信使が天皇に謁見したことは一度もなかったが、対面に至らずとも朝鮮通信使の正使以下要員らは京都に入る際には常に公服で威儀を整え、天皇に対する敬意を表していたのであった。この敬意をそのまま明治天皇にも示したことは明らかである。

以上のように、第1次の朝鮮修信使の正使の服飾には、服制改革の模索と伝統の固守という両面性が共存しており、近代化に直面した朝鮮社会を修信正使の服飾の状況からもみてとることができるのである。



図2 『THE ILLUSTRATED LONDON NEWS』の挿絵にみる修信正使の服飾